

第一章 主権者または国家の支出（十）

第三部 公共事業・公共機関の支出（七）

全年齢の人々の教育機関に要する支出（一）

多くの時代において教育は宗教が中核を担い、その眼目は現世の善良な市民の養成よりも来世への備えに置かれた。教師の生活基盤は、聴衆の自発的寄付、法にもとづく土地収入や什一税・地租、定められた俸給や手当などに分かれ、一般に前者（自発的寄付）に頼るほど努力と熱意は持続しやすい。このため、新宗教の教師は、給付に安住して信仰と敬虔の維持を怠り、情性に流れて自らの制度すら守れなくなった既成宗教を批判する場面で、しばしば優位に立つ。資金に恵まれた公認宗教の聖職者は教養と品位に富む一方、庶民に響く力や、成功と制度化を支えた資質を次第に失いがちで、人気取りに長け、大胆だがときに見識に乏しい熱狂的布教者の攻勢に、あたかもアジアの南方諸地域が北方からのタタール人の侵攻に対して無力であったかのように、手をこまねくことがある。行き詰まると、当局に頼って相手を治安攪乱者と位置づけ、弾圧・破壊・追

放を求めがちで、ローマ・カトリックがプロテスタントを、英国国教会が非国教徒を迫害したのはその典型である。概して、どの宗派も法の保護の下で一世紀か二世紀の安定を享受すると、新興宗派から教義や規律を突かれる攻撃に有効に抗しがたくなる。学識や文章では既成教会が勝つこともあるが、大衆の心をつかみ信徒を増やす技法では常に対抗側が有利で、英国では資金に恵まれた既成教会がその技法を長く軽視し、非国教徒やメソジストが磨いてきた。もつとも、任意募金や信託、その他の制度上の方途によって各地の非国教徒の教師に独立財源が与えられると、熱意は薄れ、機敏さも鈍りがちで、多くは学識と才気に富み人格的にも敬われるが、大衆受けする説教者ではなくなる。これに対し、メソジストは学識では非国教徒の半ばほどにとどまっても、人気ははるかに高い。

ローマ・カトリック教会については、既成のプロテスタント諸教会に比べ、下級聖職者の勤勉さや熱意が自己の利得という動機によっていっそう強く保たれる、との見方がある。小教区の聖職者は生活の多くを信徒の任意献金に依存し、とりわけ告解は収入増の機会になりやすい。托鉢修道会は生活のすべてを献金に頼るため、いわば戦利品がなければ報酬のない軽騎兵や軽歩兵にたとえられる。小教区の聖職者は、定額の給与に加

えて授業料や謝礼で一部の収入を得る教師に似ており、その収入は勤勉さと評判に左右される。他方、托鉢修道会は、その全収入が自らの働き次第で決まる授業料や謝礼に全面的に依存する教師に近く、庶民の信心を奮い立たせるため取り得る手だてを尽くさざるを得ない。マキアヴェッリは、聖ドミニコと聖フランチェスコの二大托鉢修道会の成立が、十三世紀から十四世紀にかけて沈滞していた信仰と敬虔を蘇らせたと指摘している。カトリック諸国では、信仰心は主として修道士と、より貧しい小教区の聖職者によって支えられ、一方で高位聖職者は紳士あるいは学識者としての素養を備え、部下の規律は保つものの、民衆の教化にはほとんど労を払わないのが通例である。

当代随一の哲学者であり歴史家は、次のように述べている。「国家における多様な技芸や職業は、社会全体の利益を広げると同時に個人にも益をもたらす。したがって為政者の基本方針は、導入の初期段階を除き、運営を当事者の自律に委ね、その振興や支援も恩恵と利益を受ける当事者の判断と自主性に委ねることにある。職人は、顧客の支持が利潤に直結すると知れば、腕を磨き、いつそう勤勉に励む。無用で不適切な干渉がなければ、供給はつねに需要におおむね見合い、釣り合う水準に落ち着く。」

国に資し、時に不可欠でありながら、個人には直接の利益や楽しみがもたらされにく

い職務がある。この種の職務については、国家は通常とは異なる方針へと見直すべきだ。生活の安定を保証する公的支援を施し、職務の性質上生じやすい怠慢を防ぐため、その職に固有の榮譽を与え、重層で明確な指揮命令系統と厳格な上下関係を制度として整える、といった手立てが必要である。財政部門、艦隊の運用、司法に携わる者がその典型である。

一見すると聖職者は第一の部類に属し、その養成や支援は、法曹や医師と同様、教義に親しみ霊的な奉仕や援助から益と慰めを受ける人々の私的寄付に委ねて差し支えないように思われる。こうした動機づけが強いほど勤勉さと用心は増し、実践と学習を重ねて絶えず注意を払うことで、専門的技能に加え、人の心を扱い導く力も日ごとに高まっていく。

だが冷静に見れば、聖職者が私利追求に走り過ぎる傾向は、賢明な立法者が抑えるべきだとわかる。とりわけ真実の宗教以外の多くでは有害であり、真実の宗教であっても迷信や愚かな思い込みが持ち込まれて本質が損なわれがちだからである。聖職者は自らの価値や神聖さ、権威を誇示しようとして他派への強い嫌悪を支持者に植え付け、情性的な信仰をおおる新機軸を次々に打ち出す。その結果、説かれる教義は真理や道徳、礼

節や品位への配慮を欠き、抑えの利かない大衆の情念に迎合するものが選ばれていく。

煽情的な宣伝や勧誘が横行し、各会堂は新たな「顧客」の奪い合いに走る。やがて当局は、聖職者に恒常的な制度を設けず経費を節約したはずの策が、むしろ高くついたと気づくだろう。宗教指導者に定額の俸給を与えて過剰な活動を抑え、信徒の他派への流出を防ぐために必要最小限の監督と活動だけを求める仕組みの方が、品位と実利を兼ね備えた穏当で得策な妥協だと理解するはずだ。こうして宗教的配慮から始まった教会制度が、最終的には社会の政治的利益に資することが確認されるだろう。

聖職者に恒久的な独立財源を与えることの是非はさておき、その効果を見越して付与する例はまれである。宗教論争が激化する時代には政治の派閥抗争も同様に激しくなり、各勢力は自派の利害に合う宗派と手を結び、教義の採用、あるいは少なくとも支援という形で結びつく。勝者に与した宗派は庇護を受けて反対派を抑え込み、敗者に与した宗派は勝者の敵意を買う。勢いづいた宗派の聖職者は大衆への影響力と権威を強め、自派の有力者すら掌中に収め、為政者に自らの意向の尊重を迫る。彼らの要求は通例、第一に反対派の抑圧、第二に自派への独立財源の恒久的付与である。自分たちの勝利への貢献を理由に戦利品の分け前を得て当然と考え、民衆の歓心や気まぐれに生活を左右され

る暮らしにも飽き飽きしているため、将来の影響より当面の安逸と便益を優先してそれを求める。為政者は本来手元にとどめたい資源を割く必要があるため渋るが、先延ばしや言い訳を重ねた末、結局はやむなく応じる。

もし政治が宗教の力に頼らず、勝者も特定の宗派に肩入れせず中立を貫いていれば、諸宗派は等しく扱われ、人々は自らの判断で指導者と信仰を自由に選べただろう。その場合、宗派は大幅に増え、ほとんどの会衆が小宗派として独自の教義や教説を掲げるようになっていたに違いない。教師は信徒や弟子の維持・拡大に努めるとしても、条件が同じで競い合う以上、特定の一派や教師だけが突出することは難しい。宗教教師の利害に根ざす熱意や行動力が社会にとって危険になるのは、一宗派のみが公認される社会か、全体が二、三の大宗派に分かれ、各派の教師が規律と序列の下で歩調を合わせて動く場合に限られる。反対に、社会が二百や三百、さらには二千や三千の小宗派に分かれ、いずれも公共の安寧を乱すほどの力を持たないのであれば、その熱は概して無害だ。周囲に敵が多い環境では、小宗派の教師は、政府に支えられ広く崇敬を集める大宗派の教師には稀な寛容・中庸・率直さ・節度を身につけざるを得ない。孤立に近い小宗派同士は互いを尊重し、便益や快適さ、合意にかなう相互の譲歩を重ねるうち、教義は荒唐無稽

や欺瞞、狂信から離れ、より純粹で理性的な宗教へ収れんしやすくなる。もつとも、宗教立法は昔も今も、そしておそらく将来も、大衆の迷信や熱狂に左右されるため、そのような宗教を法として確立するのはどの国でも難しく、今後も望みは薄い。この「教会統治の計画」、より正確には「教会統治の不在」の構想を、独立派と呼ばれる熱心な宗派が英国内戦末期のイングランドで打ち立てようとした。もし採用されていれば、出自は非哲学的であつても、宗教原理一般について今日までに最も哲学的な温和さと節度を育んでいたに違いない。実際にこの構想が実施されたのはペンシルベニアで、信徒はクエーカーが最多ながら、法律はどの宗派も優遇せず、それがこの温和さと節度をもたらしたと伝えられる。

しかし、平等な扱いが直ちに全ての宗派、あるいは多数派にまで穩健さ・節度・寛容を行き渡らせるとは限らないとしても、宗派の数が十分に多く、いずれの規模も公共の安寧を脅かすほど大きくならなければ、教義への過度の熱中は深刻な害とはならず、むしろ一定の効用や利点をもたらし得る。さらに政府が、あらゆる宗派への不干渉を徹底し、宗派相互の不干渉も義務づける方針を明確に示せば、分派はおのずと速やかに進み、ほどなく望ましい数に達するはずだ。

文明社会で身分差が定着すると、道德にはつねに二つの体系が並立する。厳格な体系と、寛容ないし放縱的な体系である。両者の核心的な違いは、繁栄や行き過ぎた陽気さから生じる軽薄という悪徳に、どれほど強く否認を示すかにある。寛容な体系は、贅沢や放埒で時に規律を欠く享樂、節度を超えた快樂の追求、貞操の逸脱（少なくともどちらか一方の性）を、露骨な不品行がなく虚偽や不正に結びつかない限り、大目に見る傾向がある。これに対し厳格な体系は、こうした過度を最大限にいう。軽薄という悪徳は庶民には致命的で、わずか一週間の軽率な遊興や散財でも、貧しい職工は長く立ち直れず、絶望の果てに重大犯罪に及ぶことすらある。ゆえに、思慮深く善良な庶民ほど、こうした過度が暮らしに即座の致命傷になり得ることを知り、強い拒否感と嫌惡を抱く。他方、上流の人々は、数年に及ぶ無秩序や浪費でも必ずしも没落せず、一定の放縱を樂しめることを富の利点と見なし、非難されずに許される自由を地位の特権と考えがちだ。その結果、同階層の者の行き過ぎには、ほとんど不承認を示さず、示しても軽いたしなめにとどまる。

多くの宗派は庶民の間から生まれ、最初の支持者や初期の改宗者、さらには多数の信者も主としてその層から集まってきた。このため、少数の例外を除き、これらの宗派は

一貫して禁欲的で厳格な道德観を掲げてきた。既存の制度や秩序の見直しを訴える相手がまず庶民であり、その層に最も有効に届く手段が禁欲の強調だったからである。さらに多くの宗派、恐らく大半は、その度合いをいつそう強め、ときに滑稽で愚かと言えるほど誇張して厳しさを示し、名声や信頼を得ようとした。結果として、この過度の厳格さこそが、しばしば何よりも強く庶民の尊敬と崇敬を引きつける主因となってきた。

地位と財産を備えた者は大社会の中で目立つ存在とされ、常に人目にさらされているため、ふるまいの隅々に至るまで慎重さと自制が求められる。権威や評判は世の敬意に左右される以上、名誉や信用を損なう行為は許されず、その階層に定められた道德が寛大であれ厳格であれ、その規範を厳密に守る責を負う。これに対し、身分の低い者は大社会では目立たない。郷村では人目があり自制も働くが、大都市に出れば匿名の陰に紛れ、監視も自己統制も緩み、卑しい放蕩や悪徳に流れやすい。無名を脱し、品位ある社会の視線を確実に引き受ける有効な道は、小宗派に加わることだ。加入の時点で、それまで得られなかった一定の評価が与えられる。宗派の信用と体面を守るため、同信の間は互いの行動を見守り、醜聞を招いたり、互いに求め合う厳しい道德から大きく逸脱すれば、法的強制がなくとも除名や破門といった重い処分に至る。その結果、小宗派で

は庶民の道徳はたいい著しく整い、概して国教会よりも規律が行き届き厳然としてい
る。ただし、その道徳はしばしば過度に厳しく、社交性を損ねがちである。

しかし、簡便で効果的な手立てが二つある。これらを併用すれば、国家は暴力に頼ら
ず、国内の小規模宗派に見られる倫理・道徳由来の非社交性や過度の厳格さを和らげる
ことができる。

第一は、科学と哲学の学びを広く行き渡らせることだ。国家は、中流以上の層には概
ねこれを普及させ得る。その方法は、教員に俸給を与えて弛緩を招くのではなく、高度
で難解な領域も含む審査制度を設け、専門職に就く前や、信任と利益を伴う名誉職の候
補となる前に、合格を必須条件とする、というものである。国家がこの層に学習を義務
づければ、わざわざ教師を官が配置する必要はない。やがて人々は、国家が用意できる
以上に優れた教師を自ら見いだすだろう。科学は熱狂や迷信という毒に対する最良の解
毒剤であり、上層が守られれば、それが下層にまで深く根を張りにくい。

第二は、公共の娯楽を頻繁に催し、その賑わいと明るさを保つことである。ここでい
う奨励とは、不名誉・不品行・わいせつに当たらない限り、私益を目的に絵画・詩歌・
音楽・舞踊・演劇・興行・展示などで人々を楽しませようとする者に、全面的な自由を

認めることを指す。これにより、迷信や狂信の養分となる憂鬱は、多くの人から容易に晴れる。公共の娯楽は、こうした熱狂を煽る狂信者にとって常に畏怖と嫌惡の的であり続けてきた。娯楽のもたらす陽気さは、彼らが狙う付け込みやすい心理と両立しないからである。とりわけ演劇は、彼らの策動を世間の嘲笑や公的非難にさらしがちで、他の娯楽以上に強い怨嗟の的となってきた。

法が特定宗教の教師や聖職者を優遇せず、宗派間で差を設けない国であれば、彼らが君主や主権者、行政府といった国家権力に特別に依存する理由はなく、任免に統治者が関与する必要もない。この場合、統治者の務めは一般国民に対するのと同様、彼らの間の秩序と平穩を保ち、相互の迫害・虐待・侮辱・圧迫を防ぐことに尽きる。ところが、特定の宗教が国教として公認され支配的地位を占める国では事情が一変し、統治者はその宗教の教師や聖職者多数に相応の影響力を及ぼしうる手段を持たなければ、身の安全も政權の安定もおぼつかない。

国教として確立された公定教会の聖職者団は巨大な組織で、共通の方針と精神のもと一体となって利害を追い、ときに一人の指導者の采配に従って動く。組織の利益は君主の利益と一致せず、しばしば齟齬し、ときに真っ向から対立する。最優先は民衆に対す

る權威の維持であり、その權威は、教義全体の確實性と重大性、さらに永遠の苦しみを避けるには細部に至るまで無条件に受け入れるほかないという前提に支えられている。

君主が軽率に教義の些末を嘲つたり疑問視したり、そうする者を人道的に庇えば、君主に依存しない聖職者は名譽心から即座に反発し、君主は不敬と断じられ、宗教的恐怖が総動員されて、民衆の忠誠はより正統で従順と見なされる別の君主へ移りかねない。彼らの要求や越権に異を唱えたり、退けたりしても危険は変わらない。教会に背いた君主は、信条のすべてに敬虔に従うと公に誓っても、反逆に加えて異端の罪まで着せられがちである。宗教の權威は他のあらゆる權威より強く、宗教が呼び起こす恐れは他の恐れに勝る。公認の宗教教師が君主權を揺るがす教えを大衆に広めれば、君主は暴力か常備軍の力に頼るほか、權威を保ちようがない。だが常備軍も長期の保証にはならない。兵の多くは民衆から徵募され、同じ教えに容易に感化されるからである。東ローマ帝国の存続期を通じコンスタンティノープルでギリシア聖職者の騷擾がたびたび政変を招き、またローマの聖職者による騷擾が幾世紀にもわたり欧州各地で激動を引き起こした歴史は、国教の聖職者に適切に影響を及ぼす手段を持たない君主の地位が、常に不安定で危険であることを明確に示している。

宗教的教義のような精神領域の事柄は、世俗の君主の本務ではないのは明らかである。君主は人々を守る力には長けていても、教え導く役割にふさわしいと見なされることは多くない。ゆえにこの領域では、結束した既成教会の聖職者が持つ権威に、君主が自らの権限だけで対抗するのは難しい。それでも、社会の安寧や君主自身の安全は、多くの場合、聖職者が広めると定めた教義次第で左右される。君主がその決定に正面から異議を唱えるのが難しい以上、その形成過程に影響を及ぼす必要がある。その手段は、多数の聖職者に抱かせる恐れと期待、すなわち免職その他の処罰への恐れと、さらなる昇任や要職への抜擢を期待させることに尽きる。

キリスト教会の受益職は、君主の気まぐれで動くものではなく、終身または善良な行状の続く限り有効な、自由保有に近い恒久的地位である。もしこれが不安定で、君主や大臣の些細な不興で罷免できるなら、民衆は聖職者を宮廷の雇われと見なし、教えの信用は崩れ、宗教的権威は成り立たない。さらに、君主が派閥的・扇動的教義の過度な布教を口実に、法を踏み越えて暴力的に地位を奪えば、迫害は当人と教義の人氣と影響を一〇倍に増し、厄介さと危険も一〇倍にする。恐怖に頼る統治は拙く、わずかでも独立性を主張できる団体に対してはなおさら用いるべきではない。威嚇は反発と不満を増幅

し、穏当に扱えば容易に軟化や撤回へ導けた反対を、かえって固定化してしまう。フランス政府が不評な勅令を各地の高等法院に登記させる際に常套化した強圧策は、めったに成果を上げず、反抗的な構成員の一斉投獄という強硬策でさえ効果は乏しかった。スチュアート家の諸君主も、イングランド議會の一部議員に同様の圧力を試みたが、やはり手に負えなかった。他方、現在のイングランド議會は別の手法で「運営」されており、シヨワズール公が一二年前にパリ高等法院で試みた小さな実験は、同じ方法ならフランスの高等法院もより容易に扱えたことを示したが、継続はされなかった。調整と説得は、常に最も容易で安全な統治手段であり、力や暴力は最悪で最も危険である。ところが人は往々にして、悪い道具が使えないか使う度胸がない時にしか、良い道具を選ばない。力を使う能力も胆力も備えていたフランス政府は、だからこそ調整と説得を軽んじたのである。もっとも、確立教会の尊敬される聖職者に力や暴力を向けるのは、危険どころか破滅的だということを、歴史と経験は教える。自派と良好な関係にある聖職者の権利や特権、身体的自由は、最も専制的な政府でさえ、同等の地位や財産を持つ他の人々以上に手厚く尊重してきた。穏やかな統治のパリから苛烈な統治のコンスタンティノープルまで、専制の度合いにかかわらず事情は同じである。とはいえ、この集団は力では屈

しにくい、他の集団と同じく容易に「扱える」。君主の安全と公共の平穩は、その扱い方、すなわち昇進や任命など恩顧の配分をいかに巧みに行うかに大きくかかっている。

古代のキリスト教会では、各教区の司教は聖職者と司教座都市の市民による共同選挙で選ばれた。もつとも、市民の選挙権は長くは続かず、その間でさえ、市民は靈的領域の当然の指導者と見なされる聖職者の影響下にあつた。やがて聖職者は民衆集会の煩雑さを嫌い、司教は自分たちだけで選ぶ方が容易だと考えるようになった。修道院長の選出も同様で、多くの修道院では修道士が選任した。教区内の下位の受益職や下級の教会職の任命は司教が担い、適任と見た聖職者に授けた。こうして、教会内部の昇進や要職人事の裁量は教会側に集約された。君主が選挙に一定の間接的影響力を及ぼすことはあり、選挙の実施許可や結果の承認を要する慣行がとられた場合もあつたが、聖職者を直接的かつ十分に統御する手立ては持たなかつた。このため、聖職者の野心は君主ではなく同僚団体へと向かい、昇進の期待もそこに限られた。

欧州の広い地域で、ローマ教皇はまず、ほぼすべての司教職・修道院長職、いわゆるコンシストリオ所管の受益職の任命権を段階的に掌握し、さらに様々な手段や名目で各教区に属する下位の受益職の多くまで支配下に置いた。その結果、各司教に残ったのは、

自教区の聖職者団の体裁を保つ程度のごく限られた権限にすぎず、この体制により各地の君主の地位はいっそう弱まった。聖職者は各地に分散しながらも、一人の長のもと統一方針に従う霊的な軍隊として組織され、各国の聖職者団はその分遣隊となり、周辺諸国の分遣隊どうしは容易に連携して増援や側面支援を行えた。しかも各分遣隊は、駐在地の君主に養われつつもその支配から独立し、むしろ外国の君主に従属したため、その外国の君主は、いつでも当該国の分遣隊の力をその国の君主に向けさせ、他国の分遣隊の力でそれを支援することができた。